

第十五講 レポート講評と総括

レポートはコリントス戦争勃発時におけるスパルタやボイオティア(テーバイ)、アテナイ、コリントス、アルゴスなど主要な諸国が抱えていた内部事情と戦争へと向かう対外政策との関連を問うものである。

先ず基本的事実として各国が深刻な党派間の対立を抱えており、フィリアやクセニアという関係を通して容易に外交政策と結びついてしまう構造があったということに言及しているのかが問われる。その為にはクセノフォンや『ヘレニカ・オクシュリンキア』の記述を引用することも求められる。

各ポリスの個別の事情についても考察することが求められる。スパルタに関しては「キナドンの陰謀」事件に言及することが要求される。とりわけホモイオイと呼ばれる完全市民からヒュポメイオネスと呼ばれる劣格市民への転落、ヘイロタイと主人であるスパルティアタイとの関係などへの考察は重要である。またアギス家とエウリュボン家との王家の間での競合と対立、リュサンドロスと両王家との関係なども重要な項目である。

ボイオティア(テーバイ)、アテナイ、コリントス、アルゴスについてはそれぞれの党派間の権力をめぐる確執と外交政策について論を建てることを期待している。ボイオティア(テーバイ)ではスパルタと強い協力関係にあるアスティアスとコイラタダス派からアンドロクレイダスとイスメニアス派に政治指導権が移っていたことと、後者がスパルタの干渉を極度に警戒していたことに言及しているかどうかのポイントとなる。アテナイに関してはペルシア王の許に亡命してアゲシラオスの小アジア遠征軍と対峙していたコノンの活動、そのコノンと連動してスパルタの影響からアテナイを自立させようとしたエピクラテスとケファロス派、スパルタとの関係に慎重なアイシモスやアニュトス、トラシュブロス派など、スパルタとの関係をめぐって意見が分かれていたことを指摘しているかどうかを評価材料としている。

コリントスに関してはスパルタと親密な関係にあり、ペロポネソス戦争中コリントスの政治を主導してきた寡頭派。その寡頭派体制を覆し、コリントスをボイオティア(テーバイ)やアテナイに接近させた富裕者や、アルゴスとの統合を模索することになる民主派に言及し、それぞれがコリントスの外交政策にどのように絡んでくることになるのか、考察をして欲しいと考えている。またアルゴスに関しては、ペロポネソス戦争中の革命を主導し、民主派の反撃に遭ってスパルタに亡命せざるを得なかった寡頭派、その寡頭派の手から国権を奪い戻すのに成功した民主派、という党派の間で分断された政治状況に言及することを本レポートは求めている。

その上でコリントス戦争に向かう政治プロセスをどのように押さえているのか、評価の対象とはなる。実際のレポートはこれらの全てに言及・考察しているわけではないが、枠組みそのものは理解されているように思われる。そういう意味ではペロポネソス戦争の終了からコリントス戦争勃発までの十年間の政治プロセスがしっかりと理解されていたことを感得させる。